

琵琶湖と私

加藤 竜太（経済学部助教）

私は魚釣りが好きであるから、幼年時から琵琶湖には特別な思い入れがある。私は生粋の江戸っ子であるが、父の仕事の関係で幼い頃には琵琶湖を少なくとも年に一〜二回は釣りをするために訪れていた。もちろん、仕事の父についてくるわけであるから、わざわざ釣りのために来たというのは適切な言い方ではないかもしれない。

私が釣りをしていたのは浜大津からちよつと下ったあたりである。今と比べれば水の色も随分と綺麗だったし、住んでいる魚も全く違っていた。早春には浜大津あたりでも結構な大きさの本モロコが釣れたものだった。もちろん、その頃はぼてじゃこと呼ばれる外道のタナゴがわんさかいて、地元の釣り人などはうんざりしている様子であった。でも私のような東京の子供にとってはタナゴもすばらしい釣りの対象魚であった。

ぐ目の前で次々に鮎を捕らえていく。このわずか二十センチ足らずの浅い湖岸の自然界は、東京育ちの釣り好き少年にとってはあまりにも強烈であった。

このようなイメージをよき時代の私の琵琶湖とすれば、私にとつての最近の琵琶湖は釣師の私が全く予想もしていないことが起こっていた。モロコどころか、ぼてじゃこすらいいではないか。繊細な日本の魚はどこかに行つてしまい、釣れるのは外来魚ばかりである。湖魚専門の魚屋に美味しそうに並んでいるあの湖魚は全く釣れない。今でも魚屋の店頭に並んでいる魚は本当に琵琶湖産なんだろうかと疑いたくなるほどである。

この変容ぶりはすべて人間の仕業である。生態系を無視した結果、琵琶湖が変わってしまった。人間が変えてしまったという意味でこれも環境問題である。一方で、外来魚を釣りに琵琶湖を訪れる人も多く、今や一つの観光産業でもある。環境維持と産業育成のうまいバランスこそが経済学者が答えるべき環境問題である。でも釣師としてあるいは美食家として昔の琵琶湖に思いを馳せれば、炭火で焼かれた薄塩味の本モロコを思い出すのは私だけであろうか。

真夜中の琵琶湖

二摩小百合（経済学部二回生）

琵琶湖は、私にとっていつも当たり前の存在でした。これまで生きてきた二十年間ずっと、変わらずただ静かに、ただ優しくそこにあって、私を見守ってくれている。そんな風に感じられる存在。「琵琶湖と私」というフレーズを聞いて思い浮かんだのはそんな言葉と感情でした。

生まれたときからずっと滋賀県、それも平野部が少なく琵琶湖に近い湖西に暮らしている私は、物心ついたときから毎日と言ってよいほど琵琶湖を見て育ってきました。ですから、琵琶湖の色んな表情、大波に荒れ狂ったり、大雨で洪水になったり等、他の湖では考えられないような事など、も知っています。ですがやはり私の心にあるのは、日本で一番大きな湖等という社会的な面ではなく、前述したように穏やかで優しく、いつも変わらずどこからかひっそりと見守っていてくれる、まるで理想の母親像とも言えるような琵琶湖の姿なのです。

その中でも、特に鮮明に心にある琵琶湖の表情は、何と言つても真夜中の顔です。空も琵琶湖も境が解らないほど真っ暗で肅々とした中、ただ一筋の月光だけが水面を照らして



いる。私は今まで生きてきた中で、これほど美しい情景を他に見たことがありません。そしてその姿に幾度となく励まされてきました。どんなに辛いことがあつても、その姿を見れば何故か不思議と微笑んでしまふ。そして、この景色をまたいつか見ることが出来るのなら、明日も頑張ってみようかという気持ちにさせられるのです。

このように、私にとつて琵琶湖は心の拠り所とも言える存在なのです。もしかしたらこれから先、進む道によっては滋賀を離れる事になるかもしれませんが、どこにいっても私の心には変わらないあの琵琶湖の姿があつて、それを糧にどんな事も乗り越えて生きて行くでしょうし、そして最後には滋賀に、琵琶湖に帰ってくるでしょう。いつもそこにある、私の大切な心の故郷。あなたにも、そんな場所がありますか？

## 変わりゆく琵琶湖の風景

杉江 徹（教育学部教授）

私は高校まで湖北の長浜で生まれ育ち、二十年ほど前から再び琵琶湖に近い膳所に住んでいます。やはり何か惹かれるものがあった、琵琶湖の近くに住まいを求めているのかも知れません。とはいっても、子ども頃最も親しみを感じていたのは伊吹山で、琵琶湖はたまに出会う従兄といったところだったでしょうか。今振り返って琵琶湖のそばで育ったということ強く感じるのは食べ物で、当時、刺身といえば卵をまぶしたフナづくりでした。また私の実家では、祖父母が健在の間は毎年百匹ほどのフナズシをつけていました。時々水を換える必要があったのですが、おもり石をのけるのが子ども頃からの私の仕事で、あのフナズシの何とも言えないにおいが懐かしく思い出されます。最近ではどちらもめったに口にできなくなりました。

琵琶湖がより身近に感じられるようになったのは、膳所に住むようになったからで、石山から浜大津まで、湖岸の散歩道はずいぶん整備されました。時間によって、天候によって、

場所によって姿を変える琵琶湖の風景を楽しんでいます。一方、私は週末の土曜日を皇子ヶ丘のテニスコートで過ごすことが多いのですが、残念ながらコートから見える琵琶湖の風景がずいぶん変わりました。湖岸に立ち並ぶマンション群を見ると結局はこれが現代文明の姿なのかという思いがします。たまに長浜に帰って、無惨に削り取られた伊吹山の姿を見たときのように。



湖北野鳥センター前で撮影

## 琵琶湖は私の大学生活の場

中井 智子（教育学部四回生）

一回生のときから約四年間、豊かな自然と水に恵まれた滋賀県で過ごしてきました。奈良県出身なので琵琶湖とは縁遠い生活を送ってきたのかというと、実はそうではありません。私の両親がウォータースポーツ好きということで、私も幼い頃から琵琶湖に慣れ親しんできました。だから、私が滋賀大学に進学したこともごく自然なことだったのかもしれない。

大学に入ってどのクラブに入ろうか迷っていたとき、一番気になったのがヨット部の試乗会のチラシでした。せっかく滋賀の大学に進学したのだから、琵琶湖を体全体で感じながら新しい友人とクラブ活動を楽しめたらどんなに素晴らしいだろう、と思って即入部しました。実際、湖上の風を受け、水しぶきを浴びながらのヨットの練習はとても新鮮で、興味深いものでした。ほかのスポーツとは異なり、ヨットに乗るときは五感をフルに活動させていなければならず、苦労したことも多々ありました。冬近くには、寒さで身を凍らせていることもありました。それで

も、私を琵琶湖に足を運ばせていたのは、その美しい自然です。クラブをしながら、春には桜、夏は湖水の暖かさ、秋は紅葉、冬は山々に積もる雪など、湖上から年中四季を感じる事ができました。クラブ活動以外にも、研究室による調査の一環として、調査艇で湖上に出ています。調査をするときは、感覚ではなく、科学的に琵琶湖について知ることができました。

このように、私の学生生活は琵琶湖なくては語れないようなものになっています。琵琶湖での経験、琵琶湖について感じたこと、学んだこと、それら全てが私の貴重な財産になっています。そしてこれからも、琵琶湖について深く関わっていきたいと思います。

